

英領インドにおける「宗教」言説：
ガンディー研究者としての立場から

間 永次郎

発表者は、インド建国の父M. K. ガンディー（本名：Mohandās Karamcand Gandhī; 1869–1948；通称：マハートマー・ガンディー）の研究を行っている。具体的には、ガンディー個人のヒンドゥー教ヴィシュヌ派（Vaiṣṇava）の宗教思想が、ガンディーが率いた英領インドにおける反植民地運動（1920–1947）の展開に及んだ影響について分析している。

本発表では、発表者が自身の研究を遂行する上で直面している次のような理論的問題について論じたい。まず当然予想されることであるが、インドという非西洋圏の「宗教」を研究の対象とする限り、発表者は昨今流行している宗教概念批判論の基本的テーゼを引き受けざるをえない。つまり、植民地期に宗主国側のイギリス人が自分たちのキリスト教的枠組みの中から、インドの多種多様な地域慣習を「ヒンドゥー教（Hinduism）」という実体化された「宗教（religion）」として規定していったことの知的暴力の問題である。後にreligionの「原語」として理解されるようになるサンスクリット語の「ダルマ（dharma）」の概念は実定宗教としてのreligionの意味に還元不可能な多義性を内包するものであった。

とはいえ、英領インドの宗教概念は、安易に宗主国側の一方的支配の過程で生まれた近代的構築物と言い切れるものではなかった。なぜなら、少なくとも19世紀後半以降のベンガル人郷紳層（bhadrālok）やインド国民会議派（mahāsabha）の知識人を対象にする限り、religion概念は彼ら自身のdharma概念を自己規定する上で明らかに積極的機能を持っていたからである。近代ヒンドゥー教言説の最も重要な担い手であったガンディーやヴィヴェーカーナンダやブラフモ・サマージを例に挙げても、英米のキリスト教徒や比較宗教学者のreligion概念や神智学者のspirituality概念は、前者のdharma概念の理解の深まりに不可欠な役割を果たしていたことが公に語られていた。

そして、このようなreligionでもdharmaでもあるガンディーらのヒンドゥー教思想は、それまでイギリス人が知的支配の範疇に収めることができなかったインドの地方農民にも広くアピールした。殊に1920年代以降、地方言語のグジャラーティー語、公用語のヒンドウスターニー語、宗主国側の英語というトリリンガルな言語空間でインドの宗教的覚醒を説いたガンディーは、植民地史上初の非エリート層を含めた下からの国民運動を開始することに成功した。つまり、religion概念の明確な影響下で生まれた近代ヒンドゥー教言説は、非近代的な農民の精神性に対して決して支配的意味を持つものではなかった。

以上のように、近年の宗教概念批判論の視座は発表者の英領インドの宗教研究に安易に適応できるものではない。これらの点に光を当てる中で、発表者は従来のreligionとdharma概念との知的権力関係を問い直し、両者を適切に捉えるための新しい理論的枠組みを模索したい。